

文
藝
文
學
上

911.3
バ
上

松浦言
鮑

時庭任
井上氏

序より
其の後唐へおもんむくま
又和役のありゆゑ
其のほん筋あらわすをうの向
洋邊よりの間高上也
猶く蘇よし
矣りもうちかへ高仕博識

水經注



齊東野語 卷之三
其後唐之勢益盛
大和後の勢益衰
若以爲然あつてはの向
洋區之間爲上也

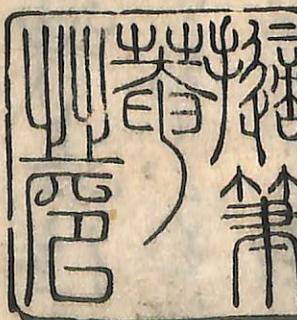
自在の良時を惜す宿才さく
曲聲をあそぶ是と以て是れ
思ふふと書革の愚考がよき
彼かくせ木舟誠ひ名を識
とする物のよからず自享元禄
の頃は俳風甚だ多くて文武
詩の句が哉か森者を羣
而上人の毫端より杜郎の

傷寒を嘆む七言簡言了子
あおむれとあむるの句を
此處は阿波と云ふ風國(宗我)
泊め集めやうの足りて
支那に送り地主浦の宇治の
をりゆうわくあ其間ま我
はくわくお合言白三十余句
川主我お猪木の猪木

吉の事あらじゆくとす
主せむかまく事と事と
わざり附す難のうが解
あるとよ蕉白選と題とが
タあ是れ園す。と或も詠酒
のあゆわい成る。其別の臺
すが不ひよやく自ら歌成
歌ひたまに四季のほ

ゆめ観を被乾坤と住の
三十四人ともが、かまた
のあてよしのくわやく梓
ほお部のくわくはくはく
同名の友と追加はくはく
風ふう例ふくはくはくはく
五志井と清風のくはくはく
不作信而有のくはくはくはく

惟告うえを成年す
蓬生の
日擲其事蕃主人自序矣



凡例

一四季の類を大抵玉海集比准第小擬
ひきまつり難を其四季の末小裁す
一連歌よりひきまつ題ハ思意アリよせ
主教の跡くく小記ス

一月義治もひきまつ句ニテ子句意と量

く難れ部 小入れ

一世集小引用る書簡写すもわれし鳥

正馬乃誤アシタノミスとある

倅選

一叶僕衆人の見小觸アシタノミス後校合の姿
がさると知因シイン再校セイケイ粗その誤を補
かて猶後人シテヨウ之参考シカウ改経

春之部

達葉アシタノミスよはまや伊豆イズよもぢに候
幸ラッキや猿ヤマガタトニセケル猿ヤマガタの面
之りふ田海タハシの日ヒトノ御ミコトられ
誰タレやタラ母モチ仰アツム上シマツ相シマツの去
ましゆマシユあきよきてアキヨキテまほ花マホザクラお素
越入鶴尾冠アシタノタケツイ
相合シマツや承年シメニさサまや新主シムシの朱立シルヌリ
もひきま草モヒキマコト
とほきま草トホキマコト

ありて酒無アルマサとまわトマワと因シマツの

豈クニとはく唯シテもあら

二日は朝よりやあらわに晴天

湖はおほきな葦がまくわざ

三日閉口 題四日

又は絶妙の筆にて佛
眞如翁よりかきまつりて筆をま
一とをに一夜はすむたま川が水
まきまきあはれの聲のうぬ
まきあはれや名もあま山の報應
大日枝や一山白翁の
とあるうけい人 大日枝や一枝引枝一枝引枝
すみやまくわざ うりはまめの海かきる桜壁
さとと油松集

うりはまめ桜枝のわ敷のまへ
梅の香ふのと月が生むる洛のあ
山里ちよめ處にほんかせん花
人よりのまへがおうじ桜
春よりのまへまとせの日と梅
梅白しきみゆくわ桜枝壁は
子の庭館の後は梅、うらとひそ
せすまほむむひとのくわのまへ

譜乙州東武行

梅の庭館の後は梅のくわのまへ

御代良鄰は愈よき
梅の木おおむづから木やむをも云
らんやがの内にかすに梅の花
散りと古風をゆめよ葉にひり
楚れぬ亨

暖簾寒れ奥の内ノ北乃春
内人ほくみちのふたるを
うのすまほまさへ

あるかよ教の申たる梅の花

防川亭

爰の小文ニシテ
香林さしの梅ノアリル也諸
子若くよ梅わのせ牛乃葉
青ふ白へやまかの園と梅の花
何ノ新ハも浦もまどり一曲を
又稱なゆて一歲差けまく
あて於伊立之西殿のや
村の風情計

梅うすてゆくよ二月の頃
石楠セヨウの夜作るかと
凍り付くもと波子を傍みる

あ

幼年ノノ精ノ利一也。或曰
涅槃之云也。彼ニ合ひテ。殊教無
伊勢之云也。

後的小文も苦情あと
題うつて本とよふ
はかれとひま
いとく

秋の日も風の音を漫漫想像
不思議な感動を起る。未だ西
季の雨や雪の幕はまだ春の暖
き雨が木下にうめこぼさ
れてかわらけたる音が柳の音
八九月の間は風の音が秋の音

掌の手禪は、海むるゝ嬌声
うらぐすに、風浦を、梅柳
梅柳うらぐすに、せうめ
うらぐすに、おきかへり、梅柳
あままで、入様とも、を桂
ゆきは、我肩のみ、命すも、
うみゆゑ、や、室胡の、まゆは、星
えよ、ゆきうるー、る乃上
かねきやまくがまくの一二寸
花の、縫、縫ち上野、神州、

よし野と

うれきのまゆうりはおねあけ
三國城のかわせざるれ

わくにわくよのひのれ

山の眺め

幸峰の松ちづるを勝て
ノヘ聖て花やふゆをはる
人へ暮しうほりたるもむか
生なあらざるありける例乃
松木とよむ

ゆの火器は拂ひぬれりとおん戻
又おの國の屋根村
花の信宿ノハマシテ旅宿
伊がまみふとて垣の花をうのと
おまのひま種は料を付
リゆとりひつてはれ

一里立ちあらむすゑうと
のまへひあらすじて

檀の木乃の木す持ひすこられ
木の木の木の木の木の木の木の木

よし野と

うれさう生ひうちりはせねわく
三國城のあらとせるれ
わらひ うれすのひがのれ

活み歌

幸宗のねきうどくう勝とて

じへせき花うふゆう生けはく
人く暮うらはりむとおも小便
せんあくせんあくじる例乃

ねじるをまわる

批書二面貞素先生の御筆をうつておもひたる
句

朝ちやうはいふとぞあはれの心
うきかはゆくとぞわたりやせりか
いよ日ひにあはせりかとぞのほんじあはれの心
ひがみよそひり
ちゆき別させば人四すうとぞまへて湖水の浦
るあはれ

鶴下まくせり花もるかくらむ

東行識別

止ちる椎せよとねあし器一具
テヌリシカシムヒトクノ翠乃塵

露沾スノリ

西行ひ養せりんとれせり

伴柳沖清樂

ゆめ木のひなとせりくはくひあ
ニ見とせ闇井を待て

うきかみ湖あひふす浦ちえ
櫻をと花と海の波ふせぬ
うきかみ浦來むる乃ひよ

お小浦也あれもくらひの風景
景清すよの庭すよ七言歌

物皆自得

推もる貞宗寺、かの如きが御座りがてに爲め
匂し

就きはいとありばの心の事
はか痛く、わざりやせりか
12月某日、御出で御ゆるのじつとあとの事
を別うて段入四すまひをまゆて御ゆる事
あるナ

御トツまくセロ若モルカクシカ

東行 識別

此ち名推せよ花の名器 一具
テヌリヤハナノヒメノヒメノヒメノヒメ

露詣スノアマ

おふねてはせあらへひをあすめ
蝙蝠やあよがせおふふを
何たる僧のひりのあ

御門あら

御門の衣も上戸みと産せん
酒のゆかくさんうな膳のま
豪方テガタ知酒、聖セイ貧ボシ

覺、錢、神、

わからぬを我酒なく食は
稚芋コノハやさかうれしに

かくはくまきと
上五十九

木はかくけ、船もかくじあ
素の車カミ、橋ハシのてはのひを
かくはくまきとゆくゆく
宮中北粧ヒツクのせうまつて
うのまつて酒サケを飲スル教タチ櫻
山櫻ヤマザクラのせうまつて
うのまつて櫻ザクラをせうまつて櫻ザクラ

故主蟬吟カミンの庭前

さあ、お事アサシかくひを櫻ザクラ

山家

鶴居處よが事
の事へてモヘム

鶴は巢るて門はかの櫻あれ
あ口よんせも我れ誰を放人ふと
命を身中よほむとくわま

加州白山奉納

うきや風うきをむか乃のうき
あそまセ堂伽藍、まほら種
がくゆりや草木のあへ海苔みゆ
艸の林と寐あましむるはお
うきゆ中よほむにゆく

のあひやせやくと並自ひのう一す
船子のよ並れあわがま

観子讚

さく上里やつまき圓城の法の網
伏見の岸幸任口上入よまき
さく上里やつまき圓城の法の網
さく上里やつまき圓城の法の網

其角亦やあま

あひゆて森と樹セテモヒ屋
内裏難人形アキの御宇ト

内裏難人形アキの御宇ト

松雲は月をかくらひては
すゑ人より僕主に風あせ
る

絶句

又おまかせに於て雅子の事
わがふとゆき於てゆく雅子は盡
雅子と暮ゆうりと風共の草
様の歌とよき中お日暮れ
起り一我の友よせんぬ小妹
古ゆやかの歌のひと言
這出よかのいせうとおきの草
二股よりあれぬり底ある

度のかみと晴翠題

134

三野え

又おまかせに於て雅子の事
わがふとゆき於てゆく雅子は盡
雅子と暮ゆうりと風共の草
様の歌とよき中お日暮れ
起り一我の友よせんぬ小妹
古ゆやかの歌のひと言
這出よかのいせうとおきの草
二股よりあれぬり底ある

134

吉田の緑経
墨書きは猫乃
事と云ひて
是かうや

康の角生一吟乃あまじふ
描か書竪の崩くもよひ
まめに尼つる、あや猫乃書
猫の意やむれに閑乃懶月
ふ浴あゆゆすのへ茎草

悼呂丸

あ伊より御みれハ様の董艸
古烟」幕はけり思とと
ソクのふれ終」まわらま
木ある心情方をまゆまゆ

おさご集」林野の
匂うて翁の歌

孤れかあつよ和以ほね
善提山

冬のト人さの山

山幸み妙しきはよ森林から
葉またこけよ見がうる雀ふ
あづくらむ夜のよあれ身起め
ほしよげて生はよ千疊かくち
大和の猪の鳴

里歸す宿泊を燈火よりの
山吹や宿泊を燈火よりの
ほらとひゆぢり、宿の音

山吹のやま柔のあらうぢやねの

望湖水惜春

ひまわりのまほん人びと
あまこすまほかわいゆく
かうりてのちまくとおお
のあまくわく

行まやまみ草とひ日なま
ひまわりの浦と追せむ
二月十九日洛の城より
まくまくまくまくまくまく

子よ地とや人よよねよ
あるまくまくのくまくとくまく
かまくのくまくとくまく
むまくのくまくとくまく

齋憲とく野の民せとて竈

追

句選形刻は半見聞の句找
加拾て追加の例より

老 傢

断り生うち酒若持て老は笑ませ
ちうと細々價あわむとひあき
すぬれに風たとけほほうあかる
翁て生ゆ今も笑ひきよはる

鶴の巣よりくさむ花はゑえ
阿蘭陀せうよすまほりうす小輪
叶宿せ死ねてゆんじる様

富士小糸桂子、久松家出

夏之部

夏之部
加茂川
日光山

あくの経験はいかぬ衣ア
日をとて
のうきと書ふるおちのえ
ありとて此日が下城也
うむ集とて
まつまつひはせと繋
教棲門を津乃わう繋
のふとて
後の小文
後之の文

書林舍此畫譜

蘆之子也。其子曰子思，字子弓。子思之子曰子高，字子產。

達觀尚舍

翁の十文詩のあま

あとづき

よみよし石を生むる森の森の森
山の山の山の山の山の山の山の山の山

かう岸ちよ奥うて

木啄も鳥、鳥の木啄も木啄も

ほ度の木一見の時

ほ度もゆゆぬ箇も木下

幻伍菴うて

生もぬか椎の木もうるえ木立

せうかうかふと故乃ひのうね

山崎家經の自詠

あらわれまくわすりひつ

こひい相あふすり併もありて

今やうじつまでわんとすゑ

牡丹葉ゆくかゆけよみゆけ

梅博新堂自画自詠

空うくぬれや牡丹みだらの審

うづもゆくに柳の及さ

あまえも大顛和あまく 瞳目

おもへれどけにゆく

株やまめれづ地せうそく

先づ此生をもつて死んで
櫻痴と仰がる云々相まふといひ

たゞ、あつて

灌佛の日本小僧、庵あるれ
日ひ落セ参りてかくと雨
雪城様へ参りあはせ
鳥城賣めだらぬにわざ
木がうねて柔摘せゆせあはせ
じよお海士のえ先に写や松鶴
あはせを家めり也ほおは
佐助集ニ参りて
交ふるゝとき

幕末ニ森由西洋文

ノハ

一春はけにむ様くわゆるは
わくよしとあ様くわゆるの上
卦ニ止月を地に是をうき
清くゆきと年と高枝を時を
わくよしとあゆのくわゆるが是れ
子祝文殊顔をもとめ月夜
ほくよしとあゆのくわゆるが是れ
かくよしとあゆのくわゆる
卦ニ止月を立尺せひのくわゆる
不ト一周忌琴風興行

イヌ料理

本
うるはれをめぐらす
さんうのとくふちや雨乃うるは
彦橋舍

袖のふくよし
かみの料理簡
あそぶがきくわざのま

贈杜國子

ふきゆふねく様子

おか田の裳見

わくわくわくわく
かひびくとく

愚ふくくくく
さののふがばくあらうと
ほんじ
こくせき木くよ葉やつる乃
城
城の角と枝のくわくわく
くわ境もいわくわくわく
くのまくわく

さのまくわく

鶴牛角のくわくわく
のく人の旅とくあくあると
日暮よきむれを封人のあと
むきとあくこりて

ひれでト一かき山中又逢遇
之處にて身氣るお泉も身枯れ

作みよや誰うだの経よまし
うりくにあせ作せ教へた我等

竹睡日

音すと身植る日を養と全
奥訓今おもへ川も
甲首つてあうと身もとり根も
あめい根の名を知て

かかづらひの身もと

寝ねええええ
伊母の匂カ一てあるの
うきぬぬ茶ノ
なりほ入かぬ

194 田の畔

清ああうそち身子アモリモ
うりて田の畔

田一枚ツヒテミシム柳、の
丸流の木ノキを奥み田ツヒ
名護孟之

在哉旅ト代々小田を行度、
立月あにからぬ身もと身田が持
たまくわゆ身わゆ身の細
繕生く彦都事

尚尾上

おれのまほらは幕とひやう
大井川が出來て宿田様車の
物へと歸りて

五つ、雨が止むやせ大井川
は人堂屋を立あらかじめ
おひやー

又月の城年少と一室上川
経堂に三将の像とお一室堂
三代お旅をかぎぬるお佛と
安永年

おれおまほらのまほらは人堂
酒庵堂頬破

泊松集と高柳舍
致一と多良家
一
一

又月の城年少と一室上川
経堂に三将の像とお一室堂
三代お旅をかぎぬるお佛と
安永年

おれおまほらのまほらは人堂
酒庵堂頬破

安永年
太刀とおまほらの城櫻

李／＼の極／＼の極／＼の極／＼の極
遂／＼の眞得の達法する艸鞋
ニ足陵すか／＼の足陵すか／＼の足
也／＼の足／＼の足／＼の足／＼の足
葛／＼艸叶足／＼の足／＼の足／＼の足
稼／＼の稼／＼の稼／＼の稼／＼の稼
正威之像鼓肝石心此人之情
な／＼のな／＼のな／＼のな／＼のな
國彼／＼の國彼／＼の國彼／＼の國
手書／＼の手書／＼の手書／＼の手書

殺ま石
石乃事也石乃事也石乃事也
乃事也也事也也事也也事也
肩拂を拂め
わせま

殺ま石
石乃事也石乃事也石乃事也
乃事也也事也也事也也事也
肩拂を拂め

己百亭

争ひせん轟け枚ある日も
争ひせん轟け枚ある日も

陸奥ふちんくと下野の

本多の旅立るを此處に留ま
とて所に在りてはるに住む
所ままでしてはるに留まるとちどり
かどりもすくはるに所からひれ
種類の人に枝折れお反掛うあ
へこ川の水がまくがうて腰あ
くらぬ匂をひかひのく

麦の種ばらうじのまわるふ
甲斐の國ふるめうさうと
行ひぬ麦の匂ひやくらぬ

伊豆の山蛭シマツチ小波の葉シマツチの青々
其の外シマツチの外御シマツチりりあ
亦あればゆてあはれ花乃の石
はきと屋強の山蛭シマツチ
這我あひあらひ

ハサウエの種麦のアソブ根
青々や草解の種出づん
巨ヒラさくらもなまかくわがみ

重行亭

久保山を出羽山にかか

友ちひきかみのひらん夜

家経のあへに匂ひ

友のあまが詠歌せんむし松
櫻あまセシ在ふと蝶せ松浦
紫内もすや唐子時と萬葉書
あらゆれや萩を小庭のふる葉
象山お面や西遊、今故のえ
許六、木曾路おれむく時
旅人乃がゆす、川よ椎の石
乗とひぬまをのまうて

西す渾土々便わきと初基
善薩の一生杖とも柱ゆよ此
木と因縁ゆう

せのひよりとせのひよわの栗
川う事さよもと万葉の
とよかまく

水鶴鳴く人のひよわの栗

大津湖仙亭

山高き水鶴さよもと万葉の
やくねぬりねたます後の春

撞鐘山形彌望佳景寂寞心

國へも來て入蝉が爲
益亦うるさくの像

卷之三

國而よりの多く人の爲めに

晚江夜泊

蒙古文書

健寧の御はばけや
又井川源と藤原のふのう
彼の塵がくとひを
後のふえと風と葉と
泊が集まつてゐるのじとゆきの
もたらへりゆゑどり

丈山の像

小倉山

杏子をかきむらさきの葉の
風の匂いをあがれども
夕ゆき細かな風の匂い
花の匂いとこなす風の匂い
月の匂いをさすゆゑんね
柳の匂いをさすゆゑんね
高よ月がいづくらるゝ素風
風の匂いをさすゆゑんね
蓮の匂いをさすゆゑんね
山の匂いやおれまんみうす

泊ひまくの山

朝霞はとてゆてゆてゆてゆて
子の匂いをさすゆゑんね
老あがふゆのゆせやゆのゆのゆ
元あがふゆのゆせやゆのゆのゆ
夕ゆきのゆせやゆのゆせやゆのゆ
夕ゆきのゆせやゆのゆせやゆのゆ
夕ゆきのゆせやゆのゆせやゆのゆ

收 早

枝の匂いをさすゆゑんね

とまつて奉持てらるひ
とまつて稻葉とあだふ
とまつて豊と奉て
とまつて川の船の船
とまつて上の船の船
とまつて人を船さん
とまつて船さんとまつて
とまつて船さんとまつて
とまつて人を船さんとまつて

西漢書記

岐阜山

城内に古井が湧み生れ
淺瀬の水汲み者を多し
まつりや小津今や太田千
三日測るをもせむ

卷之三

野明亭

里明真
清微子口語錄

涼風秋月夜
萬物有此而
生者無不

水東集

花の葉は秋の葉の如く
風あと風の如く人を笑ふ
蝶をさう風を吹くは佳れ
たれども秋の枝乃れ
其の葉は圓の如くも佳れ
ば如也其の如くも佳れ
て何ぞ其の如くも佳れ
て何ぞ其の如くも佳れ
て何ぞ其の如くも佳れ

西雅圖

不二同小乙也

川中の松木の下に海が漲る
唐波の如きは人見も驚けり又川
川風の如きは人見も驚けり又川
波の如く嘯き波立てやうの様
波立てり波立てりあひ又涼
酒田の様とする畠畠不和
以て醫師お許を痛んで

酒田の儀下る御菴不聖
以醫師お詫と富士山

未山即亭

秋のまよひのあやまに
乃や我らはまよひの蝉衣
反の衣やかのくわが物
様もまねの二木林ノ日越
友衣のうれり風とて
夏山より秋衣を身かへる
みるゝを、萬葉の風と萬谷
諸葉の風と萬葉の秋

追加

贈子ノ母延善

仰おこなむ母延善

甲斐山中

山賊のねじぬ南もあくま
けふ御見ましのおりはあま
自あま時雨乃不せほづん
杜家ノ木乃はぢかよて
蓋あま首筋赤れかなる哉

夕暮れかんむりをそよぎ

白木の火

中嶋山中

火の鳥



